

労働と職業

(一)

この地球上に人間が出現して以来、人間の生存と労働は切離すことの出来ないものであった。生きるという事は働くということであった。このことは、現在も原理的には少しも変わっていない。

が、原理的には少しも変わっていない事が、現実には原理通りではない、という矛盾した事柄になっている。大分前から、人間は労働しなくても生きて行けるようになっていたのだ。大分以前とは、むろん十年や二十年以前ということではなく、何百年も昔からということである。他人の労働が作り出した物を、自分は労働することなしに入手して生きるのは、原理的にとんでもない間違

である。病人とか、幼児とか、労働能力のない人間にだけ例外が許される。働かざる者食うべからずなのだ。

それについて、権力や資本による搾取ということは、古くから言われていてすでに常識のようなものになっている。搾取をなくさねば、人間は人間らしく生きられない。権力や資本を永久に追放しなければならぬ。この事も今更私が言うまでもないことのようにだ。(むろん、それは今更言うまでもないことなど片づけてしまふのでなく、なお繰返し繰返し言い続けねばならぬことだが、此処ではすでに一般化された常識、ということに一応しておく。)

日野善太郎

それとは別に、あまり一般には言われていないこと、

指摘されずにいることについて考えてみたい。職業についてである。

前々回には私は、労働者の語義の混乱について述べたが、労働者の語義について言えることは当然労働の語義についてもあてはまるのである。労働とはいえないことが労働の仲間入りをしているのを、一寸注意すれば我々はいくらでも見つけ出すことが出来る。

銀行員の仕事、教師の仕事、バアのホステスの仕事、厳密に「労働」と言えるだろうか。筋肉労働だけが本来の意味の労働であるという見方からすれば、それは労働とは言えない筈である。

今日、私たちが「働いている」とか「働きたい」と言うとき、その「働き」は労働をさすのではなく「就職している」とか「就職したい」と言う意味に使われているのが普通である。つまり、労働と職業とが、ごっちゃになっているのである。

この世には数えきれないほどの種類の職業がある。その中には到底、労働とは称べないものも多い。必要とすることを言うならば、人間全体にとって、不必要と思えるものも少くはない。しかも職業はつねに搾取される労働ばかりではなく、逆に他人の労働を搾取る職業もある。

なのだ。

労働と職業とは重なりあう部分もあるけれど、要するに別なものである。職業とは、なりわいであり、暮して行くための方便なのである。労働と職業は、いずれも人間の生存にとって必要なものだけれど、必要の質が違うのだ。

会社を経営するのも職業であり、その会社に雇われて働くのも職業である。プロ野球の選手も職業であり、土工も職業である。

王貞治の職業はプロ野球の選手であり、美空ひばりの職業は歌手であり、菅原文太の職業は映画俳優であり、大江健三郎の職業は小説家であり、糸山英太郎の職業は会社経営であり、田中角栄の職業は政治家である。

それらの職業はすべて労働ではない。衣食住の何一つだって、直接つくり出すことはしないし、それを運ぶこともしないが、こゝに名をあげた人たちはみな、夫々の職業によって生活の資を得ており、同じ時代の多くの人たちよりはるかに豊かな衣食住を得ている。

いくつか例をあげた中で、田中角栄の職業は政治家、ということにひっかかる読者がいるだろうと思う。若しかしたら田中自身も塩辛声を張り上げて、政治は職業で

はないとがなりたてるかもしれない。建前としてはそうであろう。政治とか、宗教とか、芸術とかが職業であることは、在り方としておかしいとは言えるのである。

若し、政治家が職業でないというなら、歌手も、俳優も、作家も職業とはいえない。だが現実には、職業革命家などという奇妙な熟語さえまかり通っている世の中である。今日ほど政治が職業化されている時代はないのではないだろうか。

政治は統治の別名であって、本来反人間的なものであるが、それでもそれなりに人間社会の交通整理的役目になってきたし、現在も未来も、完全な自治が実現するまで、その役割をになうて行くだろう。その面からだけみれば、たしかに政治は、政治家自身が暮して行くための方、収入源であってはならない。職業であってはならない。

だが、政治は政治でしかないのだ。権力を得た者が、彼の都合の良いようにしか交通整理をやらないのだ。社会全体を私物化する方向にしかむかないのだ。それが職業化するのには当然なのである。

もう少し別の事を考えよう。

王貞治や、美空ひばりや、菅原文太や、大江健三郎は、

その職業によって多くの収入を得て豊かに暮している。彼らの名は長者番付の上位に毎年のように見る事が出来るだろう。彼らは夫々の才能によって、人々のあこがれの的であり、あこがれの的であることによっていよいよ収入を増し、収入が多いことでまたあこがれの的になる。豊かに優雅に暮したいのは、たいして誰でも同じである。だが、誰でもそうなるわけにはゆかないのが今の世の中なのだ。豊かで優雅な暮らしは所詮、夢にすぎない。現実の貧しさがすべてである。

貧しければ貧しいほど、夢は夢にすぎないと知りながら、見果てぬ夢を想うのも人情である。ましてその夢の手がかりとなるサンプルがそこにある。歌謡界の女王だって、元をただせば横浜の魚屋の娘じゃないか。王だって、文太だって、王侯貴族の出身ではない筈だ。夢は夢でしかないが、若し才能に恵まれれば絶対実現不可能とはいえない、と思えてきたりもするのだ。

まして高校を出たばかりの少年が、少しばかり野球の素質に恵まれているからといって、巨額の契約金を積まされたり、この間まで水漬たっていたような少女が、少しばかりルックスや声がよいからといって、ステージやブラウン管に花々しく登場したりするのを見れば、それ

は案外身近かな処に転がっている幸運のような気がしてくる。そんな少年少女の登場を、マスコミが鳴物入りで浮き浮きと騒ぎ立てる。汗や油にまみれて働く者は馬鹿馬鹿しくなる。

職業は言うなれば身すぎ世すぎの方便である。何を身すぎに生きようと、生きて行くことに変わりはあるまい。同じことなら、苦勞のしづめで生きるより、楽に儲かる職業について、面白おかしく生きた方がいゝ。さしずめ掛掛松なら「あれも一生、これも一生、こいつは宗旨を替えざりなるめえ」と思入れたっぶりの見得を切るところだ。

むろん、野球選手や歌手や俳優が誰でも王やひばりのようになれるわけではない。彼らは稀なる成功者なのであり、抜群の素質や、好運にプラスして、他の何倍も精進している筈である。

話をしばらく野球だけに限ろう。今年一九七四年夏の甲子園高校野球の予選参加校は、二七〇九校をかぞえた。各校の野球部員は僅かな例外（灘高は部員七名では野球は出来ない）と予選出場をあきらめたをのぞけば、最低九名を超えている筈だ。計算を単純にするために平均十名と少なめに見ついても、全国の高校野球少年は二万

七千名を超えている筈である。実際はその二倍かもしれない。

二万七千の少年の全部がプロになりたいと思っただけだろうか、若しなれたらという少年まで含めれば、意外とその数字は大きなものになりそうだ。とまれ、野球が好きで日々の練習にいそしみ汗を流している高校生が二万七千人いることは事実なのである。

その二万七千人の中から将来プロになれる少年がどれだけのいるだろう。日本のプロ球団は、セ、パ両リーグで十二チームしかない。各球団が毎年採用する新人が、夫々三十名に上って三百六十人だ。二万七千人の一・五%にもみたくない。更にその中から一軍選手として飯が食って行けるようになるのは、その一〇%ぐらいいと見ても多すぎるかもしれないのだ。まして、王のような大選手は十年に一人位しか現れない。

プロ野球選手は、そんなに割のいい職業ではない。その事情は、他のスポーツだって同じことだし、歌手や俳優だって同じである。

いや、私が言いたいのは、それらの職業が割がいいか悪いか、ということではない。それらも含めて、職業とは何かということだ。

## (11)

職業とは何か、という問への答は、身すぎ世すぎの方便、という答がすでに出ている。だが、それはまだ職業とは何かを考える出発点でしかない。その先がある筈である。

先に幾つかあげた例の中から小説家について考えてみよう。

近頃、世間をやゝ騒がせた文学的事件の一つに藤本義一の直木賞受賞がある。藤本は例のイレブンPMのレギュラー司会者をはじめTVタレントとして世間に顔を知られていたから、彼の受賞は一寸したニュースバリューがあった。世間よりジャーナリズムの空騒ぎの方が先走った嫌いがなくてもないが、それはどんな事件のときにもよくあるパターンで、世間はジャーナリズムに引きづけられた形になる。

藤本義一とその作品に受賞の資格があるとかないとか、直木賞という文学賞に權威を認めるとか認めないとかは、さしあたって問題にしない。

文学賞がジャーナリズムを賑わすようになったのは、石原、開高、大江らが芥川賞を受賞した頃である。文芸春秋新社の商業政策ということもあったが、見落せない

のは、それが一九五〇年代の前半、朝鮮戦争以後の日本の資本主義が特需ブームによって立直り、高度成長へ向って歩み始めた時期だということである。つまりそれは、その後文学作品が商品として市場を拡大すると、資本主義の伸長とが比例平行して進んで行くきっかけになった事件だったのだ。

それ以後、小説家は食べて行ける職業であるばかりでなく、花やかなスターという側面を持つ存在となった。勿論、それ以前にも流行作家というものはあったが、その収入、その知名度は比較にならない。戦前、文士と言えば貧乏の代名詞のようなものだった。戦後の、それも一九五五年以後のそれは、たとえ荒正人が、なかば諧虐的に、なかば本気で「現代の英雄・小説家」と称んだようなものとなった。

小説に限らずに、ずっとジャンルをひろげて考えると、ペン一本で生活している人、書くことを職業としている人の数はおびただしいものになる。明治の昔、斉藤緑雨が「筆は一本也箸は二本也。衆寡敵せず」と嘆じたのは雲泥の差だ。

小説家が、歌手やプロ野球選手と同じく職業たり得るのは、エンターテイメントの提供者として、レジャー産

業の一部となつてゐるからである。そして、その故にこの職業もまた一種の花やかな雰囲気包まれてゐる。

小説が必ずしも高尚な芸術でなければならぬ、と言ふことはない。物書きがすべてオピニオンリーダーでなければならぬ、と言ふこともない。歌手や俳優と社会的身分のへだたりがなければならぬ、と言ふこともない。その収入がどれだけ以上に増えてはならない、と言ふこともない。

が、歌手や俳優やの社会的影響力よりも、小説家のそれの方が大きい筈である。一方が技芸を売り物にするのに対して、一方はより多く彼自身の内面にかかわる物売るからである。少し乱暴な言い方をすれば、一方は自ら伝達のメディアとなることよつて成立する職業であるのに対して、一方は伝達の内容なしには成立しない職業だからである。

たとえば、藤本義一が直木賞を貰つたということは、彼の作品に対する一定の評価が、審査員によつて下された結果であるが、その評価は、文章が巧いとか、ストーリーの作り方が巧いとか、という技術的な面だけでの評価でなく、その作品が何を書いているか、ということにかかわる筈である。

やかなスターでもあつて、現代の英雄である、と言ふのは何処かゞ間違つてゐるということになる。

人が私有できるのは、肉体と意識だけである（私有という言葉が誤解を招き易いとすれば、絶対所有と言い直してもよい）。私の肉体と意識は、私の衣服のように他人に貸したり、与えたりすることは出来ない。

私の肉体は他人に見られたり触れられたりする事が出来るという、その限りでだけ他人と共有することが出来るが、見たり触れたりすることによつて、色、形、質、量を感じる意識は他人のものであり、見られたり触れられたりすることによつて、快、不快、その他を感じる意識は私のものである。両者は別のものだ。意識は見られたり、触れられたりすることがない故に絶対に「私」のものだ。

「私」の意識を他人が見たり感じたり出来るのは「私」がそれを何らかの形に表現したときだけだ。小説は「私」の意識の表現の一つの形である。ということ、ほとんど絶対に他者の介入を許さない「私」の仕事の筈である。小説が身すぎ世すぎであつてはおかしい、ということはこのためである。人が自からの意識に出発点を置いて行為することは、何によらず身すぎ世すぎ以前の問題な

歌手や俳優が、世人の注目を集めたり、演技賞などを貰つたりするのは、彼がどんな役を演じたかということより、その役をどれだけ巧くこなしたかということにかつてゐるのである。少くとも彼らの歌や演ずる役は彼らを選んだ歌や役であるより、与えられたそれなのだ。

むろん、歌手は彼自身が作詞作曲した歌をうたうこともあるし、俳優もやりたい芝居のやりたい役を演じるときもある。だが、それはむしろ例外であろう。そんなしたい放題のことをしてゐては、歌手も俳優も、職業ではなくなるからだ。

小説家だつて、出版社の註文に依つて書くということはある。書きたいものをいつも書いてゐるわけではないだろう。それでも、彼は彼の作品しか書けない筈である。五十歩、百歩のことかも知れないが、小説家の仕事にはそういう部分が多いのだ。歌手や俳優やプロスポーツマンは自分（肉体）を見世物にするだけで職業として成立つが、小説家は、いくらスター扱ひされても、自分（肉体）を見世物にするだけでは成立たない。

とすれば、それが身すぎ世すぎの職業であるというの、怪しげな言い分である。小説家が職業であつて、花

のだ。

さて、こゝで少し論点を変えてみたい。

一体、娯楽とか、芸術とかは人間にとって何なのか、ということである。

前に私は、人間の生存に必要なのは衣食住の生産と輸送なのだと言つた。それに誤まりはないと信じてゐる。では、娯楽や芸術は衣食住ではないから必要だろうか。人間は衣食住を確保するための労働だけを生涯続けていれば、それでいゝのだろうか。そうではない。衣食住をつくること、すなわち労働は人間の生存に絶対にかゝせないものだが、娯楽や芸術もまた人間にとって必要なものだ。

餓えに泣く兒に、パンと文学とどちらが必要か、どちらを与えるべきか、という命題の答は単純にはパンと答えるのが正しい。だが餓えに泣く兒にとつて、泣くという行為が文学（表現）なのだ、と答えるのも誤りではない。表現は言わば生きてゐることのしるしなのだ。

生きてゐる限り、人間は喜びにも哀しみにも出会い、笑つたり泣いたりする。最も素朴な意味での娯楽とか芸術とかの原型は、その泣いたり笑つたりのことである。

娯楽とか、芸術とかとは違ふけれど、セックスのこと

を考えてみよう。それはたしかに生殖行為の一部だけれど、たとえばパンのように人間の生存にとって必要ではない。生殖と生存とは別のことなのだから、セックスがなくても人は生きられるのだ。しかし、だからといってセックスをやめてしまおう人がいるだろうか。

或いはまた、それが生殖行為だからといって厳しゅうな儀式を行なうように、または機械で何かを作りだすように人はセックスするだろうか。悦楽なしにセックスする人はいないだろうと思う。

事佐様に（と短絡的に言っていゝかどうか判らぬが）娯楽や芸術もまた、それが人間の生存にとって必要か否かではなく、人間の本然の発露として在るのである。

とすれば、スポーツも、歌も、演劇も、小説と同じく、職業である以前に、それら自体として存在し得る筈であるし、そう在ることで夫々純粹で有り得るのだ。

にもかゝらず、それらは今の世の中の仕組みの中では職業なのである。

私たちはしばしば郷土芸能と称されるものに接することが出来る。それらの芸能では、職業的芸人は不在なのが普通である。百姓や漁師や坑夫が、歌い手または語り手であり、踊り子または俳優であり、人形使いである。

会社経営といってもピンからキリまである中で、私はわざわざ糸山英太郎の名前を持ち出した。まるきり無作意にそうしたわけではない。

「怪物商法」などというゲテモノじみた言葉をふりまき、参議院に立候補し、大がかりな選挙違反で摘発されて、世間を派手に騒がせたこの男の騒がせ方は、とても藤本義一の比ではなく、中身もまるで違っていた。

尼崎に住んでいる私は、選挙期間中、市内にベタベタ貼られた糸山の選挙ポスターを見て、胸がむかつく思いがした。そこには「地元尼崎在住の」という惹句が、人目欲し気に印刷されていた。彼が尼崎に邸宅を持っているのは事実だが、そんな風にはいかに尼崎で生まれ育った土地っ子のように見る者が錯覚するだろうと、卑しい下心が見え透いた文字だった。本当は彼の生育地は東京なのだ。少くとも中学と大学は東京なのだ。

べらぼうめ、あんな奴に住みつかれては尼崎の恥だわい、と私はむかつ腹気味に身辺の人たちに言った。宣伝カーが彼を尼崎の誇りのように言い立て、通るのを聞いての反撥だった。

選挙公報を見ると、糸山は自分の名前の上にわざわざ「全国区最年少」と書き、その短文の冒頭に「糸山英太

ふだんは夫々の労働にしがたっている人たちがそのときだけ演者になるのだ。多くの芸能はそんな形で発生し、楽しまれ、伝えられて今日の娯楽、芸術の母体となっているといっても的外れではない。

専門家はいたかもしれないが、職業人はいなかった。それが本来の姿だったのであり、現在でも望ましい姿なのだ。

私は今、ただちにそうならなければならぬと性急に論じるつもりはない。だが、本来はかくあるべきもの、という前提を示しているだけだ。この前提を抜きにして職業の問題を考えるのは大切なことを見落すことになると言っているのである。

### (三)

今回の最初に、私は幾つかの例をあげたけれど、まだ全然触れていないものももう一つ残っている。例としてあげた以外にも、数え切れないほど多くの職業があつて、その一つ一つには到底触れられないのは判っているけれど、それらは省略することにしても、論旨を進める都合と順序からして、会社経営という職業についてまず考えてみたい。

即ち青年の代表です」と書いていた。彼の宣伝カーも、「青年の代表」を強調していた。僭上な、と私は思った。誰がお前に代表を頼んだのだ。日本の人口の八〇パーセントは昭和生まれの青年、と彼自身が言っているが、それならその八千八百万人から代表になってくれと頼まれたのか。その一パーセントだって、そんなことを言う筈がないじゃないか。代表とは依頼されて始めてなれるもので、勝手に自称出来るものではない。思い上りもいい処だ。

会ったこともない糸山に、私がそんなにもひっかかり、一々不快を露わにしたのは、元々彼によい印象を持っていなかったからだ。

糸山は「怪物商法」「太陽への挑戦」などといういかかわしい著書を出し、自分があたかも金儲けの天才であるかのように、世間に吹きまくった。十年間で全国一八コース、三一五ホールゴルフ場のオーナーになった彼は、たしかに億単位でがばがばと儲けた。しかし、それは決して彼が得意気に世間に披露するようなことではなかった。

糸山は彼の才能だけで儲けたのではない。一九六九年の個人所得日本一の実父佐々木真太郎の資産を背景にし、

佐々木の新日本観光グループの組織の中でそれをしたのにすぎない。徒手空拳ではなかったのだ。

それよりも糸山が何をやって儲けたかが問題である。ゴルフ場建設、レジャー施設の建設運営、別荘のローン販売、株の買い占めなどである。どの一つを取っても人間の生存にとっては不用不急なものであり、しかもすべてが投機なのである。

スポーツについての私の意見はすでに述べた。私自身もスポーツは嫌いではない。スポーツ以外の遊びも好きだ。観客席にいるよりも自分でプレイする方を好む。

しかしゴルフだけは嫌いだ。あの遊びにはブルジョア臭が紛々としていて。広大な土地を独占して、重い荷物は人にかつがせて、何であんなものがスポーツなのだ、と思っている。と言えば、それは貧乏人のひがみだと人はいかもしれない。その通りだ、と私は答えよう。私は生まれて以来ずっと貧乏だったから、ひがみも多いのだ。貧乏人をひがませるようなものは、何によらずこの世から消してしまいたい。

或いはまた、言う人があろう。ゴルフは今や大衆化されて、ブルジョアたちだけのお道楽ではなくなつたのだ、と。

いかにもそんな風にマスコミが宣伝している。私の知った人にもゴルフ好きがいる。だが一口数万から数百万の入会金を払って、クラブに入る人がそんなにたくさんいるとはどうしても思えない。第一、私の知人たちは口をそろえて言っている。「得意先の社長がゴルフ好きなので、キャバレーなどに接待するよりゴルフ場の方が商談がととのうのだ」と。

ゴルフの大衆化と言つたって精々がそんなところなのだと思う。しかし私がゴルフを嫌うのは、別の理由もあるからだ。

ゴルフブームなどということが言われて、雨後の筍の如く、あちこちにゴルフ場が出来た。森を伐り、水の流れを変え、山を削り、谷を埋め、である。治山治水など知つたことかとはばかりの狂気の沙汰だ。

儲けるためには自然破壊なんてことも平気でやる。ゴルフという遊びを愛するからゴルフ場をつくるのではない。ゴルフ場を経営するよりそれをつくる方が儲かるのだ。

会員を募集して集めた金で土地を買い、その土地を担保にして銀行から金を借りて造成工事をし、更に第二次、第三次の会員募集をして金を集める。まかり間違つても

土地だけは残るといふ計算だが、実際には第二次、第三次の募集がそっくり儲けなのだといふ。

ゴルフクラブの会員になるのは、上流社会の仲間入りという幻想をまき散らし、一方ではゴルフの大衆化をうたい、購買慾をそめることにもぬかりはない。

ゴルフ場をつくれれば儲かる。だから次々とする。事後の経営なんか、言わばどうでもよい。そういう筋書だ。

私がゴルフを嫌うのは、そうした悪どさのためでもある。糸山英太郎はそんなことをして金を儲けた。だから糸山も好きになれないのだ。その他、別荘のローン販売とか、株の買い占め(会社乗っ取り)とか、投機的な金儲けばかりしている。実業でなく虚業なのだ。

その糸山が参議院選挙に立候補した。尼崎在住とか、青年の代表とかと言っている。私がむかつ腹を立てたのも無理なからう。そして、十億使ったか二十億使ったか知らぬが当選した。選挙違反で彼の周囲の人間が続々と捕えられた。その数は史上空前とさえ言われている。

むろん、糸山の選挙違反事件は一種のカムフラージュだ。彼と同じように、或いは彼以上に悪質な違反者がたくさんいて、そういう奴が政治を牛耳っていることは人民がよく知っている。その人民の目をごまかすための、

糸山はいけにえにすぎない。

しかし、糸山のように「俺より悪質な奴はたくさんいるのに、何故俺ばかり……」などというの筋が通らない。そういう風に言うこと自体が罪を認めたことなのだ。

それはさておき、糸山の職業は会社経営である。その会社経営の内容とは前に書いたようなものだ。金ですべてが解決すると思ひこんでいるらしい点では、田中角栄も糸山英太郎もあまり変らない。

糸山英太郎に少しこだわりましたかもしれない。だが、金儲けの爲なら何をしてもいゝという考えが、会社経営という職業の背中にべったりと貼りついているといふことだけは見たわけだ。

物を作るといふことが、必要だからつくるのではなく、つくって売れば儲かる、たくさんつくって、たくさん売れば儲けも大きいからつくる、ということに当節はなっている。

私たちの身の廻りにあるものを見てもよいではないか。すると誰でもすぐ、そういうつくられ方でつくられたものが多いのには気づくだろう。

テレビや、冷蔵庫や、洗濯機など一家に一台あればいい筈のものが、毎年少しばかりデザインを替え、少しは

かり機能を修正して新製品としておびただしく作られ、売り出されている。テレビはもう一家に一台ではなく、一人に一台の時代なのだという。去年の冷蔵庫はもう型も古く収容量も僅かで、今年の新製品こそ決定版なのだという。洗濯機だって、一家に一台あって、それが何十年も使用に耐えるなら新しい物はいらぬのに、手を替え品を替えのコマーシャルで売り込んでいる。

書籍だって、多くはそれが人間にとってどんな利益があるかでなく、売れるか売れないかを目安にして出版される。

せまい日本に自動車があふれていて、交通戦争とか、交通地獄とかと言われているけれど、メーカーは増産につぐ増産だ。セールスマンはこやかにみ手しながら、新車との買替えをすゝめ、ついでに奥様に二台目をいかがなどというのを忘れぬ。

効かない栄養剤や、有害食品も後をたたない。工場排水が川や海を汚す。スモッグが空を覆う。生産が人間の生存に寄与するのではなくて、人間の生命をちぢめている。それでも工場は日々活動し、商社は売上げ拡大に狂奔している。

利潤追求は資本の属性だが、会社経営とはそれをする

のが職業だ。ここではもはや、職業は身すぎ世すぎではなく、ひたすらなる金儲けである。

身すぎ世すぎとは、本来は他に志がありながら生きて行くために何らかの方法で収人を得ること、というニュアンスを持つ言葉だ。心ならずともかく生きて行くための手段として、志とは無関係に職につくという程の意味なのだ。

志はなくとも、人は食べていかなければならないから、何かをやらねばならない。それが身すぎ世すぎとしての職業なのだ、と言ってもよい。

が、食べていけさえすればいいでは、誰しも本当は満足しないだろう。少しでも豊かに暮した方がいいに決まっている。では職業は身すぎ世すぎであるより、ひたすらなる金儲けであるべきだろうか。

労働と職業について考えようと言いつつもまだ本題に入らないで、その入口の処でうろろしているような文章になってしまった。次回でもう一度、この問題を考えよう。